

クレムリン対決でのティラーソンの悪手

【訳者注】これは新聞テレビしか見ない人には、全くわけのわからない話である。あの世界が驚いた4月6日のトランプによるシリア空軍基地攻撃の直後に、ティラーソン国務長官がモスクワへ飛んだ。その会談の内容は明かされていないから、わからないが、ワシントンがモスクワに脅しをかけたものとは想像するだろう。しかしドクトローはそうではなく、立場は逆に、嘆願する方だった、だからあれだけ時間をかけたと推測する。これを理解するヒントは、「アメリカのシリア攻撃の多層的分析」(4/11)にあると思われる。あの攻撃では、アメリカの発射した59発のミサイルの半数以上が、実はロシアによって撃ち落とされ、標的に届かなかった。この肝心の事実を我々は知らされていない。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170413.pdf>

Gilbert Doctorow

April 13, 2017, Consortiumnews.com

トランプ大統領の軽率なシリア攻撃決断は、本国での政治的プレッシャーを軽くしたかもしれない。しかしロシアの報復は——要の「摩擦回避合意」を中断することによって——モスクワでのティラーソン国務長官を、嘆願者の立場にした。——ギルバート・ドクトロー

ロシアのメディアは、米国務長官レックス・ティラーソンの2日間のモスクワ滞在の間に、どういったことが決まったのかについて、完全な説明をしなかった。しかし、密室でのロシアの交渉の立場がどうだったかについて、またプーチン大統領が、国内問題で大統領として非常に多忙なはずの一日を、ティラーソンのために2時間も割いたことには、何かわけがあったことを匂わせていた。



国務長官の宣誓を行うレックス・ティラーソン

ティラーソンが到着する前に、ロシアのメディアは、ロシアがシリアのアサド大統領を、4月4日のイディブでの化学兵器事件にもかかわらず支援していることで、更なる制裁をかけよと言った彼の提案が、その前日のG7会議で通らなかったことを、広く報道していた。この提案は、英外相ボリス・ジョンソンから出され、ティラーソンが賛成したもののだが、他のすべてのG7メンバーによって拒否された。この派手な敗北によって、ティラーソンは、ロシアに対する最後通牒として振り上げるはずの“国際社会”からの棍棒を失った。そのため彼は、アメリカの押し付けるシリアの“政権交代”を、あなた方は支持するか、それとも西洋からの更なる経済的孤立という結果を受け入れるか、どちらかだと言った。

ティラーソンはまた、トランプ大統領の、ロシアとの関係をよくするという約束が後退したことを受けて、手土産のようなものは何も持ってこなかった。ティラーソンの空の外交カバンのことは、彼の着いた前の晩、ロシアのプライム・タイム TV で話題になっていた。ロシア連邦古参議員で統一ロシア党党首の Vyacheslav Nikonov は、“ウラジミール・ソロヴィヨフとの夕べ”番組で、ティラーソンにこう修辭的要求をしていた——「だから、アメリカとやっていくとはどういうことなのか、何をもちたのかを言ってほしい。それなら我々も考えてみようじゃないか。」

実のところ、ニコノフは、トランプ政権のこけおどしを馬鹿にしていたのだ。彼やロシアのエリートたちは、ドナルド・トランプが、ロシアとの関係正常化について議会の承認を得るための、政治的資本のようなものを何ももっていないことを、完全に理解している。

ティラーソン-プーチン会談が水曜日に行われていたとき、もう一つの視聴率の高いロシアのトークショー **First Studio** が、ホストの **Artyom Sheinin** とともに始まったが、彼は、この番組によく出演し、しばしば叩かれ役になっている米ジャーナリスト **Michael Bohm** を質問責めにしていた。シェイニン、ティラーソンの露外相セルゲイ・ラヴロフとの初対面にふれ、また、プーチンがティラーソンに会ってくれるかどうかの問題に触れながら、こう言った——「大企業には、社長に面会にきた初めての面会者には、最初、“選別インタビュー”を受ける習慣があると聞いています。どうやらティラーソンは、この選別を通ったようで、社長に話しかけることを許されたようです。これはポジティブな内容だったと思いませんか？」

言い換えると、ロシアの人たちは、ティラーソンが手ぶらでやってきたこと、そして彼は嘆願者であって、嘆願される方ではなかったことを知っていたのである。ティラーソンがやってきたのは、「シリアにおける摩擦回避に関する合意メモ」の回復を求めてだった。その理由は、アメリカにとって、今ロシアが拒否している問題は大きな心配の種で、それは、ロシ

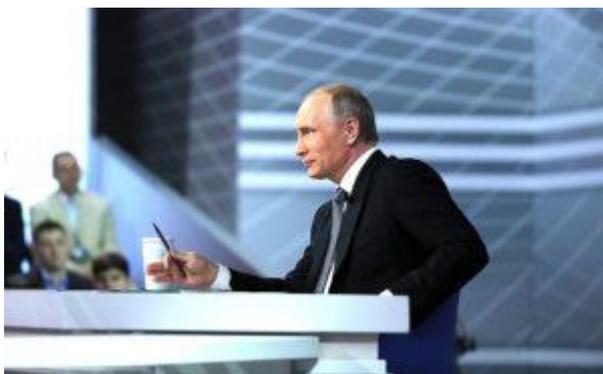
アが地域レベルでアメリカ軍と話し合い、全面戦争になりうる対決のエスカレーションになりそうな、地上または空中の衝突を避けようという合意を、ロシアがきっぱり断ったからであった。ロシアが、米ミサイルが4月6日にシリア空軍基地を攻撃したことに伴い、摩擦回避取り決めに撤回したことは、シリア内部でのアメリカ主導のIS軍への軍事作戦の継続を、危険なものにする。

4月8日、ペンタゴンの高官たちはこれを否定して、ロシアは、すべての軍と軍をつなぐホットラインを切断したと言っていた。しかしワシントンは冷汗をかいていた。シリアとロシアの防衛空軍が、NATOの航空機を狙うかもしれないという不安のために、すでにベルギーは、米主導の対テロリスト同盟内での彼らのすべての戦闘を、中止すると公的に宣告した。おそらく他のNATOメンバーも、同じ決定をしたと思われる。

一方、私の情報バックチャンネルは、ロシアは、摩擦回避取り決めの回復のためには、前提条件を定めていると指摘している。もうこれ以上アメリカは、シリア政府軍の基地を攻撃することはできない。これこそが、ティラーソンとプーチンの会談の、主たる主題であり、おそらく合意であったと、我々は確信してよい。

この結果は、1962年、ソ連がキューバから彼らのミサイルを引き上げ、アメリカは公然と勝利宣言をしたが、実はひそかに、アメリカは、モスクワが求めていたもの——トルコからの米ミサイルの撤去——に応じていた、あの“キューバ・ミサイル危機”の解決に、どこか似たところがある。しかしプーチンは、アメリカと契約して、クレムリンの同僚の間で信用を落とした、ニキタ・フルシチョフではない。プーチンは、このような取り決めることによって、その威信を増すものと思われる。

米メディアの取り方



プーチン露大統領が、2016年4月14日、年恒例の質疑応答大会で、ロシア市民の質問に答えている

一方、アメリカの主流新聞は、このプーチン-ティラーソン会談を、比較的中立的な言葉で

紹介していた——アメリカの新聞の、ロシアのすべてに対する敵意の相場を考えれば。ワシントン・ポストは他紙よりまして、モスクワ部局の David Filipov とその同僚が、ワシントンの国務省を取り上げて、両当事者は「鋭く食い違った」という否定できない事実を強調し、こう書いている——

「ロシアは、シリア大統領バシヤール・アルーアサドとの戦略的同盟を、後退させる意思がないことを明らかにした。会談は、先週のミサイル攻撃がアメリカの対露関係を、冷戦以来の最低点に突き落とした後で、何ら意味ある打開策をもたらしたとは思えなかった。しかし裂け目は広がったとしても、いくつかの一般的な妥協点は話し合われた。」

彼らによると、その妥協点として考えられるのは、4月6日のミサイル攻撃の直後にロシアが中断した“衝突回避”合意メモを、アメリカと情報共有して残すことであり、2つの核保有大国間の緊張を緩和する方法を探る、米露の作業グループを作ることだという。

その後で、論説者たちは、ドナルド・トランプの「アサドは動物だ」という最近の発言のような下らぬことを追及している。しかし、この下らぬ話題の中にも、彼らはこの会談でのロシアの政策的立場に言及していて、注目に値するいくつかのポイントがあった：——ティラーソンが、アメリカかシリアか、どちらとの絆を選ぶか、という形で持ってきた最後通牒を、ロシアが受け取り拒否したこと。アサドがイディブの化学攻撃の背後にいたという申し立てを、ロシアが一蹴したこと。そこでの化学兵器使用を調査する、“化学兵器禁止機関”をロシアが要求したこと。プーチンが、現在の状況を、アメリカのイラク侵略直前の状況に似ていると言ったこと。これらすべての重要な論点が、この論説には、米、英、その他西側の、ロシアに向けられた非難とともに、額面通り取り上げられていた。

ニューヨーク・タイムズの取り扱いは、ロシアの反応よりもアメリカの行動により注意を向けており、それは、そのいくつかの関係記事の全体的ヘッドラインが、「**アメリカがロシアに圧力をかける…**」で始まっていることからわかる。ティラーソンの訪問を扱ったサブ記事は、プーチンと彼との会談で、彼らが何に合意したかよりも、その前後に何が起こったかに、より注目している。タイムズの部局チーフ David Sanger は、ティラーソンが、彼の予期したプーチンとの会談が疑問だったために、最後の瞬間まで不安な状態に置かれたことに注目しているが、これは、このロシア大統領の、会談相手をそわそわさせる決まったやり方だと説明され、ティラーソンが来る前に、イタリアの G7 外相会議で、彼が述べたシリアについての承服できない発言のために、大統領に対し、彼に会わないようにと、ロシアの首脳たちが進言したことについては——報道され広く知られているにもかかわらず——これを無視している。

実際、タイムズの論説は、プーチンが会う気になったのはなぜか、また何が合意されたかの推測はほとんど全くせず、緊張を緩和するための作業グループのことだけに触れているが、これはサンガーが、小さな派生的問題として正しく触れている通りである。

(ギルバート・ドクトローは、ブリュッセル在住の政治アナリスト。近著として *Does Russia Have a Future?* —2015年8月出版—がある。)